

序文

本年の全国調査報告書を作成しましたので、皆様にお届け致します。この報告書は、一見すると膨大な数字とその解析の結果に過ぎませんが、このデータは日本の移植医療の黎明期から、日々大変な思いをして移植医療に取り組んでこられた先生方とそのチーム、お一人お一人の患者さんの努力と涙の全てを網羅して作られたものです。毎年、毎年、更新され、年々冊子は厚く重くなっていますが、それだけの人々の努力が積み重なっているのです。加えて、ただでさえ他の診療科と比べても多忙で、24時間365日、いつ呼ばれるかわからない状態で疲弊している移植医が、また睡眠時間をも削って、診療情報を TRUMP に登録するという大変な作業を経て報告されたものであることにも思いを馳せていただきたいと思えます。

もちろん、それだけではこの膨大なデータを含む冊子が出来上がるわけではありません。報告された生の情報を解析し、わかりやすく数字や図表にまとめて頂いた日本造血細胞移植データセンターの皆様の努力の賜物でもあります。その間断なきご尽力に感謝いたします。

移植種類別報告件数の年次推移を見ますと、右肩上がりに増加してきた総移植数も最近はその伸びが鈍化し、ついに2017年をピークに2018年は減少に転じました。さまざまな要因があると思いますが、2000年過ぎたあたりから、小児領域と55歳あたりの成人の移植数はプラトーに達しており、増加していたのは55歳を超える高齢者層でした。その背景にはミニ移植やその概念の導入による移植技術の革新がありました。日本の人口動態を見ますと現在の人口のピークは70歳を超えたあたりにあります。診療の現場にいますと、以前、とても多かった60歳代後半の患者さんがやや減少傾向にあり、移植すべきか否かの判断が難しい70歳代半ばの患者さんが増えた感じがあります。このことが総移植数の減少に関係しているのではないかと感じます。

移植細胞も多彩になってきました。HLA一致同胞間移植としてスタートした造血細胞移植は、1993年からはバンクドナーからの非血縁者間移植が行われるようになり、2000年頃からは臍帯血移植も急速に増加し、もはやドナーが得られない患者さんは特殊な場合を除きほとんど見られなくなりました。最近では親子間や兄弟でも高い確率でドナーが得られるHLA半合致移植も広く行われるようになってきました。もはやなんとかしてドナーを見つける時代は終わり、どのドナーでどのような移植をするかという時代に入ってきました。その判断をするためにも、リアルタイムの日本の情報が必要です。この報告書は現在の日本の移植の状況と成績を毎年更新して細かく解析してくれています。担当の先生方や患者さんの決断のための一助となればとありがたく思います。

第42回日本造血細胞移植学会総会会長 谷口修一
国家公務員共済組合連合会虎の門病院副院長・血液内科部長